
〈論文〉

イングランドのジェームズ1世とその宗教政策

——スコットランドの近代への途(2)——

King James I and his Religion Policy

——On the Way to Modern society (2)——

久保田 義 弘

要 旨

スコットランド王国とイングランド王国の同君連合王国が成立し、前者の国王ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世として戴冠することにカトリック教徒は反発した。本稿では、彼の統治政策に対するカトリック教徒の陰謀計画を概観する。彼は、エリザベス1世(Elizabeth I)(在位1558年-1603年)の宗教政策を継承し、国家(国王)に対する教会の従属の立場を堅持しつつ、カトリック教会の組織形態を温存する政策をとった。1559年にエリザベス1世のもとでイングランド王国においてカトリック教が禁止され、イングランド国教を忌避するカトリック教徒には罰金刑や死に至る反逆罪が科された。カトリック教徒は、ヨーロッパ大陸に逃亡し、スペイン王国やフランス王国の神学校でカトリック教の教育を受けた。カトリック教徒の勢力が、分裂し、新しい宗教勢力に押しつぶされようとしていたときに、エリザベス1世が1603年3月に崩御した。

ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世としての戴冠式を挙げる1603年7月までの間に、カトリック教徒によってメイン陰謀(Main Plot)(1603年7月)とバイ陰謀(Bye Plot)(1603年6月)が計画された。これも国教会の礼拝に参加しないカトリック教徒に課されていた重い罰金刑に対する不満から生じ、カトリック教徒による国教忌避者に対し課される罰金刑の緩和・廃止を求め、国王ジェームズ1世をアラベール・ステュワートと据え替えることが計画された。しかし、カトリック聖職者の密告によってその計画の実行は阻止された。イエズス会の聖職者が、治安と制裁の恐怖のために、当局に密告したと思われる。

ジェームズ国王は、彼自身がカトリックに改宗したという噂をかき消すために、カトリック教徒に対する罰金刑の適用を強化した。これに対しカトリック教徒の中には、1605年11月の議会招集に合わせて、ウェストミンスター議事堂を爆破し、国王を議員共々爆死させることを計画する者がいた。その政治的目的は、イングランドにカトリック国王による支配を再現することであった。実際、ジェームズ国王に替わってその娘のエリザベス王女(Elizabeth

Stewart) (1596年生-1662年没)を国王に据えることが彼等の計画であった。この計画の中心人物は、首領のロバート・ケイツビー、トマス・ウィンター、ジョン・ライトならびにガイ・フォークスなどであった。

この火薬爆発未遂陰謀計画(1605年11月5日)は、ジェイムズ国王による国教徒優遇政策に対するカトリック教徒の反発にすぎないという印象を拭いきれない。その少数のカトリック教徒の運動は、イングランドの庶民全体を巻き込んだ運動には展開しなかった。その陰謀計画は、ジェイムズ1世の宗教政策に対する反抗に過ぎなく、イングランド王国を一層主教制の国に傾かせることになったと理解される。

(キーワード：同君連合王国、ジェイムズ1世、国王至上法、カトリック教徒、国教忌避者、メイン陰謀、バイ陰謀、火薬爆発(未遂)陰謀計画、ロバート・ケイツビー、ガイ・フォーク)

はじめに

本稿では、スコットランド王国とイングランド王国の同君連合王国が成立し、前者の国王ジェイムズ6世のイングランド王ジェイムズ1世としての戴冠に反発し、彼の統治政策に対するカトリックの陰謀計画を概観する。

カトリック教徒によって計画されたメイン陰謀(Main Plot)(1603年7月)とバイ陰謀(Bye Plot)(1603年6月)は、国教会の礼拝に参加しないカトリック教徒に課されていた重い罰金刑に対する不満から生じ、カトリック教徒による国教忌避者に対し課される罰金刑の緩和・廃止が求め、国王ジェイムズ1世をアラベール・ステュワートと据え替えることが目的にされた。しかし、イエズス会の聖職者が、治安と制裁の恐怖のために、当局に密告し、その計画は未然に防ぐことができた。

ジェイムズ国王は、カトリック教徒に対する罰金刑の適用を強化した。これに対しカトリック教徒の中には、1605年11月の議会招集に合わせて、ウェストミンスター議事堂を爆破し、ジェイムズ国王を議員共々爆死させることを計画する者がいた。その政治的目的は、イングランドにカトリック国王による支配を再現することであった。実際、ジェイムズ国王に替わってその娘のエリザベス王女(Elizabeth Stewart)(1596年生-1662年没)を国王に据えることが計画されていた。この火薬爆発未遂陰謀計画(1605年11月5日)は、ジェイムズ国王による国教徒優遇政策に対するカトリック教徒の反発にすぎないという印象を拭いきれない。その少数のカトリック教徒の運動は、イングランドの庶民全体を巻き込んだ運動には展開しなかった。その陰謀計画は、ジェイムズ1世の宗教政策に対する反抗に過ぎなく、イングランド王国を一層主教制の国に傾かせることになったと理解される。

第1節 同君連合王国の成立とスコットランド統治

1.1 同君連合王国の成立

1603年7月25日に、スコットランド王ジェイムズ6世 (James VI)¹ (在位1567年-1625年) が、イングランド王ジェイムズ1世 (James I) (在位1603年-1625年)² としてウェストミンスター・アベールで戴冠式を執り行い、イングランド王位に就いた。彼は、スコットランド王であり、かつ、イングランド王であった。彼は、「同君連合王国³」の国王に就いた。その「同君連合王国」では、国王は同じ人物でありながら、両国は、それぞれ独立して外交、軍事および財政を司ることができた。

「同君連合」には、人的同君連合と物的同君連合がある。前者では、複数の独立した君主国で同一人物が君主になる。その君主国の政府は、各々の独立した機関として存続する。後者では、各構成国をまとめる中央政府が設立され、その政府の権限は様々であるが、外交、軍事および財政等の主要な政府機能は中央政府の権限下に入れられる。このように外交権限が中央政府に与えられ、この同君連合が国際法上の主体となり、他国と条約などを締結・批准

¹ ジェイムズ1世と王妃アン・オブ・デンマーク (Anne of Denmark) (1574年生-1619年没) との間には、3男4女が生まれていたが、1男2女は幼くして死亡し、また長男スターリングも18歳で病死した。次男チャールズ (Charles James Stewart) (1600年生-1649年没) と長女エリザベス (Elizabeth Stewart) (1596年生-1662年没) が生存し、チャールズは、スコットランド王およびイングランド王チャールズ1世 (Charles I) (在位1625年-1649年) として王位に就き、エリザベスは、1613年にファルツ選帝侯バイエルン公フリードリヒ5世 (Friedrich V) (在位1610年-1632年) (1596年生-1623年没) と結婚した。

² ジェイムズ1世の人物像の一端の紹介であるが、彼は、威厳を欠いた容姿をしており、野卑な言葉を吐き、饒舌で大風呂敷であり、軽蔑すべき臆病者であった。彼の読書の範囲は広く、特に神学の問題に関係していた。様々な問題に関心を示し、様々な主題に関して多くの著作を残した。

彼の王権に関する見解では、王権は、テューダ朝のヘンリー8世やエリザベス1世のものとは違っていた。彼は、王は法の制限を全く受けず、自分自身の意志以外のものに少しも責任を負わないことをもって王権であると考えていた。これが、ジェイムズ1世の王権神授の原理であった。この考えは、チャールズ1世にも継承され、議会との軋轢を深める結果となった。

³ 同君連合王国の時代は、スコットランドにとって、激動の時代であった。その第1は、国王が国を留守にしたことであった。ジェイムズ1世は、イングランド王を兼ねた22年間に、わずか1回しかスコットランドを訪れていない。またその後の多くの国王もスコットランドを訪れていない。第2に、その間、スコットランドでは、実力貴族や部族の対立、抗争が一層激化し、それに宗教をめぐる対立・抗争も加わり、イングランドのスコットランドに対する差別・蔑視に苦しめられた。

同君連合王国のその他の例を見てみよう。最初に、クヌーズ大王 (在位1016年-1035年) が北海帝国 (1016年-1042年) の王のとき、イングランド (1016年-1038年) ・デンマーク (1018年-1035年) ・ノルウェイ (1016年-1035年) の3王国の王に就任した。第2には、ヘンリー8世以降のイングランド王は、イングランド王とアイルランド王 (1542年-1801年) の両国の王になった。第3には、グレートブリテン王が、グレートブリテン王とハノーヴァー選帝侯 (1714年-1837年) に就任した。但し、ヴィクトリア女王は、サリカ法によって、ハノーヴァー女王として即位しなかった。最後に、英国連邦王国 (Commonwealth Realm) は、16ヵ国からなる。

できる。人的同君連合の具体的例として、スコットランド王ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世を兼ねる物的連合の形態をもつ「同君連合」の他に、イングランド王がアイルランド王を兼ねる人的連合形態を持つ「同君連合」（1542年-1801年）もその例である。実際、イングランドとスコットランドの同君連合王国では、イングランド王国に中央政府を置き、政治、経済、外交を仕切っていたと思われる。この意味でイングランドとスコットランドの同君連合は、物的同君連合であったと思われる。この形態は、プランタジネット家のエドワード1世とエドワード3世が描いたイングランドとスコットランドの統治形態ならびにチューダ朝のヘンリー8世とエドワード6世が描いた両国の支配従属関係に類似していたと思われる。

ジェームズは、人口が80から90万人に満たなかったスコットランド国王であったが、そのおよそ5倍の450万人のイングランド王国の国王を兼ねることになった。同君連合成立後、ジェームズ6世は、彼の死までの22年間で1回しかスコットランドには戻っていない。このことは、ジェームズがイングランドでの宮廷生活をエディンバラでの生活より好んだからであり、同時に、政治的にも経済的にも先んじていたイングランドの統治の仕組みを学びスコットランドに導入するためには、一日たりともロンドンを留守にできなかったからなのであろう。彼がスコットランドを軽視した分けはいろいろと考えられるが、彼がスコットランド王として22年の在位期間中に唯の1度しかスコットランド（エディンバラ）に戻っていないという事実は無視できない。

「同君連合王国」という政治的な統治体制にスコットランド国民が満足していたとは思えない。同君連合王国の時代は、実際、スコットランド国民にとって激動の時代であった。第1のその原因は、国王が国を留守にしたことである。ジェームズ6世による1617年のスコットランド訪問は、イングランド王を兼ねた22年の間で最初にして最後の訪問であった。その後のチャールズ1世（Charles I）（在位1625年-1649年）やチャールズ2世（Charles II）（在位1660年-1685年）などの同君連合国王もスコットランドを属国のように見みなし、スコットランドを訪問する回数も少なかった。第2のその原因は、グレートブリテンが成立するまでの間、スコットランド王国では、実力貴族や部族の対立・抗争が一層激化し、それに宗教をめぐる対立・抗争も加わり、イングランド王国のスコットランド王国に対する差別・蔑視に苦しめられた。

1.2 同君連合とスコットランド統治

1.2.1 スコットランドの経済社会状態

ジェームズ6世が王位にあった頃のスコットランド王国の経済社会状態を概観しておこう。スコットランドの産業から始める。このころのスコットランドでは、農業などの第1次産業

が中心であり、農業経営は、局地的であり、その雇用規模の小さな経営体であった。農村の耕地では、粗末な大麦 (barley)、カラスムギ (oat)、キャベツ (kail) あるいは亜麻 (flax) が育成され、その農耕地の近くでは牛や羊が飼育され、その牧草地で羊や黒牛が飼われていた。低地地域の爵位付貴族 (baron) などの領地は、使用人 (cottars) を雇っていた借地農民 (tenant farmer) に貸し出され、そして借地農民は、その領主に小作料 (tenant 料) と粉ひき機械の使用料 (粉ひき代) を支払っていた。その爵位付貴族 (バロン) の領地では、領主は、犯罪者を捕らえ、あるいは、巡回裁判のために犯罪者を監禁し、治安判事として裁判を行った。バロン領では、その領地が一つの国をなしていたと考えられる。バロンの法廷での権威は、男の犯罪者を絞首刑 (gallow) にし、女の犯罪者を溺死刑 (drowning pit or pond) に処するに十分であった⁴。

その他の産業には、鉱業や石炭産業 (coal industry) や製塩産業などがあった。そのころには石炭産業では、縦穴式であったので、その採掘には重労働を要した。塩は、生活に欠かすことのできない生活必需品であるので、スコットランド国内だけでは需要を満たしきれなく、外国から輸入されていた。スコットランドの輸送業では、嵩張るものの輸送は海上(船)で行われ、その他の財は、人の背に荷籠を背負って運ばれるか、あるいは馬に引かれた荷物用そりで運送された。海外との交易では、輸出品は、主に、石炭、羊毛 (wool) あるいは獣皮 (hides) などの素材製品 (一次産品) であった。輸入品は、主に、塩、鉄あるいは角材や板材であったが、刃物類や飲食用のコップなどの工場制生産製品なども輸入されていた。

都市では工場制生産の発展が見られた。その生産物は、工場制生産活動 (manufacturing activities) で産出され、都市の熟練した職人によって産出された。都市での熟練した職人⁵ の増加は、16世紀に入って、エディンバラで著しかった。スコットランドでは、石炭輸出都市ファイフ (Fife) や織物都市ダンディー (Dundee) などの王直轄都市 (royal burghs) の規模は、16世紀前半と比較し、殆ど成長していなかった。それに対し、爵位付貴族によって築かれた都市 (baronial burghs) の数は著しく増加した。それまで都市は、商人によって統治され、商人以外の者が市民になることは禁止されていた。しかし、エディンバラが膨張するにつれて、熟練した職人に対する需要が増加し、同時に、熟練した各種の技術職人の人口が都市で増加した。これは都市で工場制生産が進んできていたことを示している。エディンバラ以外の都市でも職人は、同業組合を形成した。同様のことが起こった。司教によって築か

⁴ 実際、死刑は希であったが、鞭打ち (whips)、焼き印 (brands)、晒し台 (stocks) などの残酷でない刑がバロンの裁判で執行された。

⁵ 1597年に、20分の1の一般輸入税が課され、同時に、イングランドからの織物の輸入が禁止された。そのため、スコットランドの生産性上昇と国内市場の拡張が必要であった。そのためには、特殊な技術の職人が必要であった。スコットランドでは、フランドル (Flanders) 等からそのような職人を連れてきた。その職人はフレミング (Fleming) と名付けられた。

れた都市グラスゴーでも、エディンバラ程ではなかったが、熟練した職人が増加した。職人の台頭がそれまで都市参事会を仕切っていた商人との間に軋轢をもたらし、都市では職人が価格を操ると疑われ、また、なめし革職人の場合には靴墨、鍛冶屋の炉あるいは肉屋の肉片で手が汚れていると、自惚れた商人や宮廷人によって疑われた。

また、爵位付貴族によって築かれた都市 (baronial burghs) が増加すると、都市間の競争も激化した。既存の都市が新興都市を押さえるために、この都市の追加的な取引権の獲得を押さえた。16世紀の間、王直轄都市間の協定が重要であった。それは、都市間の争いを規制し、その都市の権利や特権を維持させた。都市・商人と王との間でヨーロッパ大陸の主要な港を保持する協定もあった。例えば、この協定は商人に北ヨーロッパの港の中から気に入った港を選ぶことを可能にし、商人に交易の安全性を与えた。他方、国王も主要な港を確保することによって、その港を出入りするスコットランドの船籍やその取引量を押さえることができ、さらに国王はその収入を確保できた。

次に農村での住環境について見てみよう。その借地農民の住宅（家）は、その居住地域で利用可能な資材を使って建てられていた。住宅は、転居するときに持ち運ばれる大黒柱 (cruck timbers) で枠組みが造られ、その壁は泥炭 (turf)、荒い石あるいは荒打ち漆喰 (wattle and daub) などで造られた。多くは低い家であり、その家には3世代の家族のための煤けた居間があった。住宅と同じ屋根の下で居間に隣接した牛小屋 (byre あるいは stable) では冬には牛が飼われ、その入り口のそばには、牛の肥やしの固まりと家族の小使用の水桶 (washtub) があった。農村に住む人々には便所はなく、住宅の近くの限られた所が便所として使用された。

スコットランドの低地 (ローランド; Lowland)⁶ と高地 (ハイランド; Highland) では、その社会 (communities) が違っている。16世紀の終わりから17世紀の初めでは、ローランドとハイランドの人口は、ほぼ同じであったと推測される。このころハイランドにも40から50万の人が住んでいたと推測される。東ハイランドに居住する、ある氏族 (clans) では、プロテスタントあるいは長老派に改宗されていたが、その他の東ハイランドの氏族では、国教 (イングランド国教) が奨励された。中央と北ハイランドの氏族では、カトリックのままであった。ローランドではスコットランド言語 (scotch language) が話されていたが、ハイランドではゲール語が使われていた。ハイランド人の服装では、特に、その男姓の服装に特徴があった。ハイランドの多くの男は、トゥルーズ (trews) を履き、キルト (kilt) を着用していた。牧羊者のハイランド人は、狩猟技術に卓越し、バグパイプ (bagpipe) を好んでいた。

⁶ ボーダーはハイランドに似た社会構成であった。その氏族から構成されていた。ボーダーは、プロテスタントであったが、言語はゲール語ではなく、スコットランド語であった。

この卓越した狩猟とバグパイプ演奏が、低地の借地農民には見られなくなっていた。

1.2.2 スコットランド統治

スコットランドは、地理的には、ローランド地方とハイランド地方に分離されていた。ローランドは、ボーダーと中央部と東部に分かれていた。同時に、その両地方に居住する住民の気質も異なっていた。イングランド王ジェイムズ1世は、ロンドンに居ながらにして、スコットランド王国をペンで統治しようとした。ジェイムズ6世としてスコットランドを治めていたが、スコットランド高等弁務官(Lord High Commissioner of the Parliament of Scotland)にスコットランド王国の統治が託されていた。彼の高等弁務官を通じてのスコットランド王国の統治体制から推測するに、スコットランド王国とイングランド王国の間の同君連合は、ロンドンに中央政府を置き、外交、財政や軍事に関してイングランドの指導の下に行う物的同君連合の状態に近かったと理解される。高等弁務官に2代レノックス公リュートヴィック・スチュアート(Ludovick Stuart, 2nd Duke of Lennox)(1574年生-1624年没)等を指名して、そのスコットランド統治を行った。

ハイランドの統治の在り方から、ジェイムズ6世(イングランド王ジェイムズ1世)によるスコットランド統治の特徴を一瞥しておこう。この頃は、ハイランドでは氏族(Clan)が独立国を構成するように勢力を持ち、エディンバラからの支配が行き届かない地域であった。土地の境界線は明白であったが、しかし、その所有権は未解決であり、さらにその占有はもう一つの問題であった。

ジェイムズは、その「同君連合王国」の統治形態を両国議会の連合形態(その後のグレートブリテンのような連合体)にすることを望んでいた。しかし、彼の時代にはそのような連合体は実現しなかった。ジェイムズが目指した連合体は、両国議会の連合としてアン女王(Queen Anne)(在位1702年-1714年)時代に「グレートブリテン王国」として実現した。

第2節 カトリック教徒とジェイムズ1世の廃位/暗殺陰謀未遂計画事件： 2つの廃位陰謀計画事件と火薬爆発未遂陰謀計画事件

2.1 1603年のメイン陰謀とバイ陰

この2つの廃位陰謀計画事件の時代背景を述べておこう。1559年に施行された「国王至上法」⁷によって、イングランド王国のナショナルリズムが提示され、国王は、国政および宗教上の頂点に立った。このときからイングランド国王は、信仰に関して教皇至上権によるロー

⁷ また、「礼拝様式統一法」は、ローマ・カトリックに反対する厳しい法を廃止し、祈禱書からローマ教皇に対する悪口を取り除き、そして聖餐式における実際のキリストの肉体と血を主観的に信じることのできる曖昧な表現にし、一般国民(臣民)がアングリカン教会(英国国教会)に加わることを狙った。

マ・カトリック教会の普遍主義との対立を一層強めた。この法の施行によって、カトリック司教は職を失い、また、多くのカトリックの高僧は、イングランド国王への宣誓を拒否し、辞職した。それに代わって宗教改革を支持した聖職者が任命された。エリザベス1世(Elizabeth I) (在位 1558年-1603年)は、国家に対する教会の従属の立場を堅持したが、同時に、カトリック教会の組織形態(司教と聖職者階級制度による教会統治)を残す政策をとった。この法で何が異端であるかの定義が与えられ、エリザベス1世がイングランド教会の最高統治者となり、さらに、外国の王、聖職者、あるいは国家の権威を教会が宣誓することを罰した。1559年にエリザベス1世のもとでイングランド王国においてカトリック教が禁じられ、イングランド国教を忌避するカトリック教徒には罰金刑や死に至る反逆罪が科された。カトリック教徒は、ヨーロッパ大陸に逃亡し、スペイン王国やフランス王国での神学校でカトリック教の教育を受けるようになった。

16世紀末には、イングランドのカトリック教徒は、イエズス会やカトリックの神学校で教育を受けた聖職者と世俗の聖職者に分かれていた。世俗の聖職者は、教会の再興を過去の教会制度の連続と考えていたのに対し、イエズス会の聖職者はイングランドにおける宣教活動を過去との継続性のない白紙状態にあると考えていた。イエズス会はバチカンと結びついていた。1598年にジョージ・ブラックウェル(George Blackwell)⁸(1545年生-1613年没)がイングランド王国のカトリック教会の首席司祭(Archpriest)に任命された。イングランド王国での彼の宣教方針はイエズス会に近い考えであったので、多くの世俗の聖職者は、ブラックウェルの誤った聖職者の人事管理方式と過度な任務命令に不満を持っていた。控訴者(Appellants)⁹は、ウィリアム・ビショップ(William Bishop)¹⁰(1553年生?-1624年没)

⁸ 彼は、ミドルセックスで生まれ、1563年にオックスフォードの Trinity College で学士(Bachelor)を取得し、1567年に修士(MA)を取得した。しかし、1571年に宗教的理由で Trinity College を出され、1574年にフランスの Douai のイングランド学校を出た。1575年に聖職者に任命された。1576年に使徒としてイングランドに戻ったが、1578年に監獄に入れられた。そこから開放された後は、ウェストミンスターにあった Mrs. Meany の家に住み、そこから布教に努めた。

1597年にヘンリー・カジタン(Henry Cajetan; Enrico Caetani)(1550年生-1599年没)は、クレメンス8世によってイングランドの世俗聖職者の首席司祭に任命された手紙をブラックウェルに差し出した。彼は、首席司祭としてロンドンの Anthony-Maria Browne, 2nd Viscount Montagu の家に住み、イエズス会の長と密に相談して布教に努めた。

⁹ 控訴者の中には、聖職者のクリストファー・バグショー(Christopher Bagshaw)(1552年生-1625年没?), トマス・ブルーエット(Thomas Bluet)(?), ジョン・コルトン(John Colleton)(1548年生-1635年没)や平信徒のアンソニー・コプレー(Anthony Copley)(1567年生-1607年没)、ジョン・マッシュ(John Mush)(1551/1552年生-1612/1613年没)、ロバート・ドルーリー(Robert Drury)(1567年生-1607年没)、ウィリアム・ワトソン(William Watson)(1559年生?-1603年没)などがいた。

¹⁰ 彼は、首席司祭論争(Archpriest Controversy)に引き込まれた。この論争は、司祭ジョージ・ブラックウェルと多くの牧師(世俗の聖職者)との間の論争であった。世俗の聖職者がジョージ・ブラックウェル

などをローマに送り、ローマ教皇にブラックウェルの任命の無効を訴えたが、イングランドの Cardinal Protector であったヘンリー・カジターン (Henry Cajetan; Enrico Caetani) (1550年生-1599年没)の命令でウィリアム・ワトソン (William Watson) (1559年生?-1603年没)などは逮捕され、ローマのイングランド神学校に監禁された。

そのために、イングランドのカトリック教会内では、ブラックウェルとイエズス会との関係やその他の問題を巡って論争状態にあった。1598年から1603年まで、その教会は論争下¹¹にあった。この論争は首席司祭論争としても知られている。イングランド王国は、カトリック教徒間での意見の対立を利用し、首席司祭ジョージ・ブラックウェルと世俗の聖職者の意見の対立において、ブラックウェルに敵対する控訴者 (Appellants)の味方をし、彼らのパンフレットの発行に便宜を計った。1602年にローマ教皇クレメンス8世 (Pope Clement VIII) (在位1592年-1605年)は、ブラックウェルの権威を確保するその一方で、彼の不手際を非難し、世俗の聖職者の宣教に関する件ではイエズス会と相談しないことを彼に命じ、両者の間に公的和解を成立させた。このことに失望したエリザベス1世は、その控訴者の不忠誠を非難し、そして、もし自身の信仰を捨て国王に忠誠を誓う声明にサインすなら、その聖職者に慈悲を提供することを示した¹²。

カトリック教徒の勢力が、分裂し、新しい宗教勢力に押しつぶされようとしていたときに、カトリック教徒を抑圧していたエリザベス1世が1603年3月に崩御した。スコットランド国王ジェイムズ6世がイングランド国王ジェイムズ1世として王位を継承したが、ジェイムズ1世としての戴冠式を挙げる1603年7月までの期間に、カトリック教徒達によって、メイン陰謀 (Main Plot) (1603年7月)とバイ陰謀 (Bye Plot) (1603年6月)が計画された。この何れの陰謀も国教会の礼拝に参加しないカトリック教徒に課されていた重い罰金刑に対する不満から生じていた。

メイン(宮廷人の)陰謀は、国王ジェイムズ1世を彼の従妹のアルベラ・スチュアート (Arbella Stuart)¹³ (1575年生-1615年没)に替えるカトリック教徒による陰謀であったが、カトリッ

の誤った管理や過剰な任務に反対して訴えたとき、ビショップとジョン・チャーノック (John Charnock) が同業者仲間によってローマに派遣された。ローマに着くと、彼らはヘンリー・カジターン (Henry Cajetan; Enrico Caetani) の命令によって拘留され、ロバート・パーソンズ (Robert Parsons) の監視下でイングランド神学校に閉じこめられた。

¹¹ 論争の中で、1594年から95年の Wisbech Stirs がよく知られている。これは、ケンブリッジ州の Wisbech 城の囚人であったカトリック教徒の間での分裂論争であった。イエズス会士と世俗説教師の間での囚人の秩序ある共同生活をめぐる争いであった。言い争いの発端は、イエズス会士による、断食日を守ることの主張にあった。

¹² このとき、ビショップ、コルトン、マッシュ、チャーノックなど13人の控訴者がエリザベス1世に対し、公に忠誠を誓った。

¹³ 彼女は、マッシュュー・ステイワート (Matthew Stewart, 4th Earl of Lennox) (1516年生-1571年没) と

ク教徒で宮廷人コッバム男爵のヘンリー・ブルック（Henry Brooke, 11th Baron Cobham）¹⁴（1564年生-1618年没）によって指揮されたと推測されている。ジェイムズ1世の宗教政策の面からその王位継承に反対していたヘンリー・ブルックは、軍資金を調達するためにスペイン宮廷に接触し、実際にスペインの宮廷と交渉していたアルムバーグ伯爵（Count Aremberg）（1550年生-1615年没）の所に行った。彼は、ブリュッセルに飛び、そしてスペインに行き、資金（およそ16万ポンド）¹⁵を集めて、ジェルシー（Jersey）地域を通過してイングランドに戻ることを計画していた。そのジェルシーの総督が、ウォルター・ローリー（Walter Raleigh）¹⁶

マーガレット・ダグラス（Margaret Douglas）（1515年生-1578年没）の孫であった。マーガレットは、アーチボルド・ダグラス（Archiubald Douglas, 6th earl of Angus）（1489年生-1577年没）とマーガレット・チューダ（Margaret Tudor）（1489年生-1541年没）の娘であった。よって、彼女は、ヘンリー7世の曾孫であった。

¹⁴ 彼は、パイ陰謀に参加したジョージ・ブルックの兄であり、ケンブリッジ大学のKing's Collegeで教育を受けた。彼は、ジェイムズが王位に就く以前には、全く政治的な活動をしないうちの貴族であった。彼は、宗教的理由によって、トマス・グレイと共にジェイムズが王位に就くことに反対した。トマス・グレイは反カトリックであった。彼は、メイン陰謀で捕らえられ、ロンドン塔に閉じこめられ、裁判を受けたが、証拠不十分で釈放された。

¹⁵ このころスペイン宮廷は、ネーザランドやベルギーの銀行に多額の借金をしていたので、スペイン宮廷が16万ポンド（今日の320万ポンドに相当）の資金を提供できる状態にあったとは考えられない。ヘンリー・ブルックは、アルムバーグ伯爵からの情報を信じていた。

¹⁶ 彼は、貴族であり、作家であり、詩人であり、軍人であり、探検家であり、そしてスパイであった。彼は、新大陸から煙草をヨーロッパに持ち込んだ人物であった。彼は、エリザベス1世に寵愛された。彼の家系は熱烈なプロテスタントであった。メアリー1世の時代に彼の多くの近親者が逃亡した。また、彼の父も処刑を避けるために逃げ隠れしなければならなかった。そのため彼は、カトリック主義を憎んだ。

彼の軍人としての面であるが、1579年から1583年の間、アイルランドでのDesmondの反乱を抑えるために活躍し、その代償として彼はアイルランドのマンスターに160km²の土地を与えられた。彼は、そこでアイルランドで最初にジャガイモを栽培したと信じられている。彼の探検家としての面であるが、1584年の北アメリカのバージニア植民計画は失敗したが、1587年にRoanoke島に定住地を設ける計画であった。この計画は、ジョン・ホワイト（John White）（1540年生?-1593年没）の下で進められたが、しかし、スペインの無敵艦隊との戦いのために、イングランドの港が封鎖され、ホワイトのイングランド帰国が遅れたため、Roanoke植民地に物資を搬入できなくなり、この計画も失敗であった。1595年には、伝説の都市、Manoaを探して、東ヴェネゼイラとGuyanaを探検した。*The Discovery of Guiana*にその探検の様子が書かれている。これがエルドラ伝説を生み出したのかも知れない。1596年に彼はCadiz略奪に参加し、1597年には、Azores探検の副長官であった。

彼は、1591年にドーゼット選出の議員となり、1593年にコーンウォールのミッチェルの公民となり、1601年にはコーンウォール選出の議員となった。1601年から1603年までJerseyのチャネル諸島のGovernorであった。このとき、彼がメイン陰謀に関わったとヘンリー・ブルックによって証言された。彼は、その証言が虚偽であることを訴え、撤回を求めたが、聞き入れられなかった。彼は、市民法で裁かれ、有罪になった。1616年まで彼はロンドン塔に残された。投獄の間に彼は、*The Historie of the World*を刊行した。1616年に開放され、彼は、デルドラを探して、二度目のヴェネゼイラ探検をおこなった。このとき、スペインの前哨基地Santo Tome de Guayanaを襲った。イングランドに戻ると、スペイン大使によってローリーの処刑が求められた。1618年に彼はウェストミンスター宮殿で斬首された。

(1554年生?-1618年没)であった。この陰謀にウォルターが関与したという確固たる証拠はなかったが、ヘンリー・ブルックの自白に基づいて、彼は有罪になった。この陰謀は、ヘンリーの弟ジョージ・ブルック (George Brooke) (1568年生-1603年没) が関与したバイ陰謀を調査する過程で、罪を逃れようとする彼の自供によって発覚した。

バイ陰謀 (Bye Plot) は、ジェイムズ 1 世を捕らえ、強迫し、その枢密院を入れ替えようとする宗教者達の陰謀で、カトリック教徒や新教に対する寛大さを約束させようとした陰謀であった。また、この陰謀の首謀者の名を取ってワトソンの陰謀とも言われ、首謀者の一人にウィリアム・ワトソン (William Watson)¹⁷ (1559年生?-1603年没) がいた。エリザベス I 世が 1603 年 3 月に崩御すると、彼は、スペインと密通していたイエズス会を出し抜いて、スコットランドに行き、次のイングランド王ジェイムズ 1 世にカトリック教徒の忠誠を示した。カトリック教徒に対する寛大さを求める要請をしたのにも拘わらず、ジェイムズ 1 世は、エリザベス 1 世の英国国教忌避者に対する罰金刑を課す政策を改めることはなかった。そのため、ワトソンは、ジェイムズ 1 世に対する不平・不満を抱く聖職者のウィリアム・クラーク (William Clark)¹⁸ (1603年没)、軍人のグリフィン・マークハム卿 (Sir Griffin Markham)¹⁹ (1644年没?)、聖職者アンソニー・コプレー (Anthony Copley)²⁰ (1567年生-1607年没)、

¹⁷ 彼は、フランスでカトリック教徒になった。彼は、イングランドに何度か渡り、捕らえられ、拷問を受けていた。彼は、首席司祭論争 (Archpriest Controversy) で世俗聖職者の戦士であった。彼は、主教バンククロフトに保護された。1603年12月ウィンチェスターで裁かれ、罰せられた。

¹⁸ 彼は、Douai のイングランド神学校で教育を受け、1592年にローマのイングランド学校 (English College) からイングランドに派遣された 9 人の聖職者の一人であった。彼は、1600年11月、33人の聖職者が署名したジョージ・ブラックウェルに反対する抗議文に署名した一人であった。彼は、首席司祭論争 (Archpriest Controversy) で積極的な役割を果たした控訴者の一人であった。1602年5月にローマ教皇クレメンス 8 世の勅令の第 1 条の中に、控訴者の教会法に基づく能力を回復させる表現を盛り込む試みがなされた。しかし、クラークとワトソンは排除された。1602年にクラークは、Southwark の刑務所に収容された。1603年に彼は、バイ陰謀に加わり、ジェイムズ 1 世に対して謀反を計画した。彼は、ウェストミンスター Gatehouse Prison に閉じこめられ、ロンドン塔に移送され、そしてウェストミンスターに送られ、そこで裁かれ、罪状が言い渡され、1603年11月29日に処刑された。

¹⁹ 彼は、軍人であった。1594年にルーアン包囲でエセック伯のもとで軍役に着いた後に、彼はナイトに任命された。9年戦争では、Conyers Clifford のもとで騎兵隊を指揮した。特に、Curlew Pass の戦いで彼の活躍が知られている。

彼は、バイ陰謀では、処刑の判決を言い渡されたが、脱走し、その後ヨーロッパでロバート・セシルのスパイとして働いた。

²⁰ 彼は、カトリック教徒で詩人であった。彼は、イエズス会や彼らの殉教仲介には反対であった。彼は、1582年にルーアン (Rouen) で両親とともに生活し、その 2 年後、ローマのイングランド学校に 2 年間通い、そして、彼はローカントリー (the Low Countries) に行き、パーマ公爵から奨励金を受け、スペインのフィリップ 2 世の軍隊に入った。1590年に許可なしにイングランドに戻ったとき、彼は、逮捕され、ロンドン塔に入れられた。彼は、エリザベス 1 世時代に何度か投獄された。彼の作品は、エリザベスに忠誠的であった。彼は、バイ陰謀の裁きでは、陰謀の歴史を告白したために処刑を許された。

宮廷人のジョージ・ブルック (George Brooke)²¹ (1568 年生-1603 年没), あるいはプロテスタントのトマス・グレー (Thomas Grey, 15th Baron Grey de Wilton)²² (1614 年没) と議論し, ジェームズ王を捕らえ, 脅しによってカトリックに改宗させ, ワトソンを国璽尚書にする事が計画され, 同時に, 枢密院の構成メンバーを入れ替えことが考えられていた。1603 年 6 月 24 日 (洗礼者ヨハネの日) にグリニッジにワトソン達は, 彼らの目的を実行する請願をもって結集することを計画していた。しかし, この陰謀は失敗であった。首席司祭ジョージ・ブラックウェル (George Blackwell) (1545 年生-1613 年没), イエズス会聖職者のジョン・ジェラルド (John Gerard) (1564 年生-1637 年没) やヘンリー・ガーネット (Henry Garnet) (1555 年生-1606 年没) によって当局にその陰謀計画が通報されたために, その陰謀計画が未然に防止された。ブラックウェル首席司祭は, 英国国教忌避者のジョン・ゲージ (John Gage) を介してロバート・セシル (Robert Cecil) (1563 年生-1612 年没) に手紙を書き, その陰謀計画を知らせた²³。その時すでにロバート・セシルは, その陰謀計画について, 通報された内容以上の情報を持っていた。

1603 年 6 月には, ジョージ・ブルックが逮捕され, 彼は 2 つのグループの陰謀計画があることを自白し, すなわちメイン陰謀も明るみに出された。彼の自白でワトソンへの逮捕状は出され, その 8 月上旬に彼が逮捕された。また, 8 月 13 日にはウィリアム・クラークも逮捕された。その 11 月の 15 日から 18 日に, カトリック教徒のブルックやマークハムの裁判とプロテスタントのグレーの裁判は, ウィンチェスターの司教宮殿で行われた。その 11 月下旬にワトソンとクラークの処刑が行われ, その 12 月にジョージ・ブルックが処刑された。軍人のグリフィン・マークハム卿にも死刑が宣告されたが, 彼はヨーロッパ大陸に逃亡した。その後, ロバート・セシルのスパイとして彼は働いた。また, グレーも死刑が確定していたが,

²¹ 彼は, ケント州の Cobham Hall で生まれ, ジョージ・コバムとし洗礼を受けた。1580 年にケンブリッジ州のケンブリッジ大学のキング・カレッジに入学し, 1586 年に M.A を取得した。彼は, ヨークの教会の受祿聖職者で聖職録を得ていた。彼は, Hospital of St Cross の長がエリザベス女王によって約束されていたが, その約束を果たす前に女王が死亡した。ジェームズ王は, それをジェームズ・ハドソンの代理人に与えた。このことが, ジェームズに対する不満を引き起こした。彼がバイ陰謀に加担したとき, 彼は, 国王をカトリック教徒に寛容であることをもとめ, かつ, 枢密院の構成メンバーを変えることを考えていた。

²² グレーは, ジェームズ 1 世の政治体制に好意を持っていない, 宮廷に群がるスコットランド人には不満であった。彼は, カトリック教徒のジョージ・ブルックとは友達であったが, カトリック教徒の考え方が好きではなかった。1603 年 6 月 24 日の以前に, 彼はその陰謀に加わることを拒否した。陰謀計画が当局に知れたとき, 彼は, 海外に逃亡したが, 7 月に逮捕され, ロンドン塔に監禁された。彼は, ロンドン塔の審問では大逆の意思を否定したが, エドワード・クック (Edward Coke) (1552 年生-1634 年没) は, 彼が王ジェームズ 1 世の拘束に関与した調書を書き上げた。

²³ また, アンソニー・コプレーも陰謀の件をブラックウェル首席司祭に手紙で知らせていた。アンソニーは, ジョン・ゲージとは義理の兄弟であった。コプレーは, ワトソンとブラックウェルの両方陣営に関係していた。

その執行が延期され、1614年に彼は処刑された。

この2つの陰謀では、イングランドのカトリック教徒による国教忌避者に対し課される罰金刑の緩和・廃止が求められ、同時に、国王ジェームズ1世をアラベール・ステュワートと据え替えることが計画されていた。しかし、カトリック聖職者の密告によってその計画の実行は阻止された。イエズス会の聖職者は、治安と制裁の恐怖のために、当局に密告したと思われる。

その当時、イングランドの宗教界には、3つ潮流・組織があったと思われる。その第1は、イエズス会聖職者して活動するカトリック教徒の組織、その第2は、他の組織で活動するカトリック教徒の組織、そして第3は宗教組織に属さない世俗の聖職者の組織であった。特に、カトリック教徒がイエズス会の聖職者とその他の世俗組織の聖職者に分裂していた。

2.2 カトリック教徒による火薬爆発未遂陰謀計画事件

議会に対して王の絶対権を確信していたジェームズ1世は、1604年に議会を召集し、イングランド王国とスコットランド王国の統合を提案したが、議員はその提案を冷やかに聞いていた。というのは、議員を構成していた社会層は商人や郷紳であった。その多くは、ピューリタンに共鳴していたので、国王の提案よりも宗教の問題に関心を持っていた。庶民院（下院）では、イングランド王国とスコットランド王国の統合を実現し、両王国の間に平和をもたらし、また聖職者間の不和を終結させることが求められた。庶民院は、ジェームズ国王に請願書（庶民院の弁明）を提出し、宗教の問題では議会の同意を得るように請願した。しかし、議会に対して王の絶対権を確信していたジェームズ国王は議会を休会した。1604年の聖職者会議は、聖職録を受けている聖職者に典礼法規を厳密に適用することを求めた。すなわち、大主教のリチャード・バンクcroft (Richard Bancroft)²⁴ (1544年生-1610年没)は、あらゆる祭式あるいは儀式に関する条項にも聖職者の署名を求めた。旧教徒の数が増加し、社会が乱れてきたために、議会では刑罰法規²⁵が再び施行された。これによってローマ教皇に従うことが反逆罪になった。

ジェームズ国王は、彼自身が旧教に改宗したという噂をかき消すためにその適用を強化した。これに対しカトリック教徒達の中には、1605年11月の議会招集に合わせて、ウェストミ

²⁴ 彼は1604年から1610年までカンタベリーの大司教であった。1604年3月のジョン・ウィットギフツ (John Whitgift) (1530年生-1604年没)の死の後、彼はカンタベリーの大司教職に就いた。

²⁵ 1605年5月に議会は、Popish Recusants Act (国教忌避カトリック法)を通過させ、この法律でカトリックは裁判官や医者などの専門職に就くことを禁止され、また後見人として活動することも禁止された。さらに、教皇による国王罷免権が否定され、臣民には王への忠誠の誓いが求められた。国教会の教会で毎年少なくとも1回の聖餐式に参加しない臣民には、60ポンドの罰金あるいは保有地の3分の2を没収することとした。

ンスター宮殿内にあった議事堂を爆破し、ジェイムズ国王を議員共々爆死させる計画を立てた者達がいた。その政治的目的は、イングランドにカトリック国王による支配を再現することであった。実際、ジェイムズ国王に替わってその娘のエリザベス王女(Elizabeth Stewart) (1596年生-1662年没)を国王に据えることが彼等の計画では考えられていた。この計画の中心人物は、首領のケイツビー、トマス・ウィンターおよびジョン・ライトであった。

はじめに、火薬爆発未遂陰謀計画事件に加わったカトリック教徒の人物像を見ておこう。その陰謀計画事件の首領はロバート・ケイツビー(Robert Catesby) (1572年生?-1605年没)であった。彼は、父ウィリアム・ケイツビー(William Catesby)と母アン・スロックモートン(Anne Throckmorton)の3男としてウォーリックシャーのオックスフォードの近くで生まれ、オックスフォードのグロスターホールで教育を受けたが、カトリック教徒であったために学位取得を諦めた。彼の両親は、英国教会(国教)に反対するカトリック教徒であったが、彼は1593年にプロテスタントのキャサリン・リー(Catherine Leigh)と結婚した。キャサリンは裕福なプロテスタントであった。彼女の持参金は2,000ポンドであった。彼は、1595年11月にオックスフォード州のコッツウルトの小村(Chastleton)のプロテスタント教会で洗礼を受け、幸せな結婚生活を送っていたが、惨めなカトリック教徒であった。

彼は、エリザベス1世の宗教政策には不満であった。彼は、妻のキャサリンの死後、1598年に、苦悩の結果、カトリック教に改宗し、熱狂的なカトリック教徒になった。彼は、1601年にエセック伯の反乱に参加し、捕らえられ、獄中に収監され、エリザベス1世によって4,000マルクの罰金刑に処せられた。トマス・トレシャムが彼の罰金のいくらかを肩代わりし、彼自身はその支払のためにChastletonにあった不動産を処分した。彼は、エリザベス女王の崩御後も、スペインがイングランドのカトリック教徒を援助し続けるかどうかを探るために、クリストファー・ライト(Christopher Wright) (1570年生-1605年没)をフェリッペ3世(Felipe III) (在位1578年-1621年)に遣わした²⁶。エリザベス女王を継いだプロテスタントのジェイムズ1世がカトリックに寛大で、カトリック教徒に対する迫害が終結することを彼は期待した。だが、国王は彼の期待に反してカトリックの教義に不寛容であった。他の議員と共にジェイムズ国王を殺害し、イングランド国王をカトリックに取り戻すという陰謀を彼は計画した。この陰謀計画では、彼は、カトリック修道院に司教座を戻すことを狙った。1604年の初めに、彼は、その計画を実現するために他のカトリック教徒を彼の計画に誘い入れる必要があった。彼は、彼の従兄弟などの近親者を中心に共謀者を集めたと思われる。

彼が最初に陰謀計画に誘った人物は、ジョン・ライト(John Wright) (1568年生-1605年没)であった。彼は、ヨークシャーのウエルウィック(Welwick)に生まれ、その教会で

²⁶ このとき、彼は、Anthony Dunttonと言う偽名で行動した。

1568年に洗礼を受け、ヨークの聖ピーター学校で彼の弟クリストファーやガイ・フォークと共に教育を受け、1601年のエセックス伯の反乱ではケイツビーと共に逮捕監禁された。彼は、勇敢で、物静かで強靱で、落ち着いた身のこなしをする人物で、また剣の優れた使い手であった。彼の両親は、カトリックを頑なに信じていたために牢獄に入れられた。彼は、1604年1月ごろに最初にケイツビーから陰謀計画を知らされ、その共謀者になった。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、彼は、ケイツビーと共にロンドンのLambethのケイツビーの家から、ケイツビーと彼の執事のベート(Bates)と共にミッドランドのレッド・ライオン・インに向かっていたと思われる。しかし、その途中で、陰謀計画が失敗したことを知らされ、彼らはイングランド軍と武力闘争をするために支援者を集めようとした。しかし、その11月8日に共謀者が隠れていたスターフォード州国境にあったHolbeach Houseがウスター州の長官リチャード・ウォルシュ(Richard Walsh)と200人の軍隊に包囲され、彼は、銃撃戦で撃たれ、死亡した。

次に誘われた人物は、トマス・ウィンター(Thomas WintourあるいはWinter)(1571年あるいは1572年生-1606年没)であった。トマス・ウィンターは、その計画に全面的に賛成ではなかった。彼は、1604年2月にケイツビーとジョン・ライトに会ったときに、貴族院議会議が開催される初日(1605年11月5日)に貴族院を爆破し、ジェイムズ国王を殺傷するという陰謀計画を打ち明けられ、その計画には危険も伴うことを斟酌してケイツビーの計画に賛同した²⁷。彼は、ウスター州のハディングトン・コートでジョージ・ウィンターの次男として生まれ、父方の祖母キャサリン(Catherine)がジョージ・スロックモートン卿(Sir George Throckmorton)の娘であったので、スロックモートン家の子孫であり、かつ、この事件の首謀者ロバート・ケイツビーやトマス・トレシャムとは従兄弟の関係にあった。また、彼は、4代モンテグル男爵のウィリアム・パーカー(William Parker, 4th Baron Monteagle)(1575年生-1622年没)の召使いとして働いていた。この陰謀での彼の役割は、彼の語学力(ラテン語、スペイン語、フランス語を話した)を活かして、スペインなどの海外からの協力を獲得する交渉を務めた。この未遂陰謀計画に参加する以前の1601年から1602年にかけて、彼は、ローマやスペインに旅行し、2代エセックス伯(Robert Devereux, 2nd Earl of Essex)(1565年生-1601年没)の処刑によって指導者を失ったカトリックのためにスペインに渡った。しかし、彼は、スペインのアイランド攻撃の失敗のためにスペインから明確な支援を得ることを期待できなかった。1603年に条約交渉のためにイングランドに着ていたス

²⁷ 1605年11月3日にケイツビーとパーシーの3人でロンドンにおいて会合を持ったとき、トマス・ウィンターは、ケイツビーに陰謀計画の破棄を申し出たが、ケイツビーとパーシーはできる限り計画を続けることを主張し、結局、トマスの意見は退けられた。

ペインの大使 Juan de Tassis (1580 年生-1622 年没) に会った。その大使は、カトリックの反乱が上手くいくとは考えていなかった。

ケイツビーが海外(特にカトリック国スペイン)からの支援を諦めていなかったため、1604年3月頃に彼はフランドルに渡り、スペインの貴族で外交家であったジュアン・フェルナンデイス (Juan Fernandez of Velasco)²⁸ (1555 年生?-1613 年没) に会い、イングランドのカトリックの苦境を伝え、ロンドン条約の締結交渉に影響を与えるつもりであったが、彼はロンドン条約を受け入れた。そこで、彼は、ウェールズのスパイを通じて紹介されたフォークスに具体化していなかった陰謀計画を話し、賛同を得て、2人はその4月にロンドンの Lambeth にあるケイツビーのロッジに戻ってきた。1605年5月にケイツビー、トマス・ウィンター、ジョン・ライト、ガイ・フォーク、そして新たに仲間に加わったパーシーの5人がロンドンの Strand district にある Duck and Drake Inn で会合を持ち、ロンドンの Lambeth にある家屋をリースし、テムズ川を渡って運ばれる火薬を貯蔵することを決めた。1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、彼は、ロンドンの Strand district にある Duck and Drake Inn (ダック・ドレーク・イン) にいた。

次に誘われたのは、ガイ・フォークス (Guy Fawkes) (1570 年生-1606 年没) であった。ケイツビーの陰謀計画を成功させるためには、火薬の取り扱いに長けた人物が必要であった。その技術を提供した人物がガイ・フォークスであった。彼をリクルートしたのは、トマス・ウィンターであった。ガイ・フォークスは、ヨーク州のストーンゲート (Stonegate) に生まれ、エドワード・フォークスの4人兄弟の2番目であった。彼の両親は、イギリス国教会の教徒であったが、彼が8歳の時 (1579 年) に父親が死亡し、彼の母親 (Edith) はその数年後に再婚した。母親の再婚相手 (Dionis Baynbrige) がカトリック教徒であったことから、フォークスは、熱心なカトリック教徒として成長した。彼は、ヨーク州の聖ピーター学校で教育を受け、罪人を匿ったことで知られていた親戚の Harrington の教育を受けた²⁹。彼は、1591年にオランダ共和国とスペイン王国との間の8年戦争で戦うために大陸に渡り、1595年から1598年の Vervins 講和までフランスに滞在した。その戦いでは、彼は、カトリックのウィリアム・スタンレー卿 (Sir William Stanley) の軍に加わった。スタンレーは、最初、イングランド女王エリザベス I 世に尊敬されていたが、1587年の Deventer の引き渡しの際に、スペイン側

²⁸ 彼は、スペインの Constable であった。彼は、1592年から1600年、また、1610年から1612年の間ミラノ公国の総督であった。彼は、1604年のロンドン条約のスペイン代表であった。この条約の締結によって、イングランドにおいてローマ・カトリックの再興の期待は消滅した。この条約で、スペインは、イングランドにおけるプロテスタントを認めることを強制された。

²⁹ 彼の同輩には、共謀者のライト兄弟、聖職者になったオズワルド (Oswald Tesimond) (1563 年生-1636 年没)、エドワード・オルコーン (Edward Oldcorne) (1561 年生-1606 年没)、ロバート・ミドルトン (Robert Middleton) 等がいた。

について。

トマス・ウィンターは、1604年4月に大陸に渡り、カステリヤ（スペイン）の軍本部長（Constable of Castile）やウェールズのスパイであったヒュー・オーエン（Hugh Owen）にあった。オーエンを通じてフォックスを紹介された。ウィンターは、フォックスにその陰謀計画の全貌の概略³⁰を伝えたと思われる。しかし、実際には、その計画は事前に発覚し失敗したため、フォックスは、捕らえられ、計画の全貌と共謀者の名前の自白を強制され、共謀者の中で最後に処刑された。彼は、絞首刑台から飛び降り、首を折ったが、去勢され、内蔵を抜き出され、4つ裂きにされ、見せしめのために晒された。

次に、トマス・パーシー（Thomas Percy）（1560年生？-1605年没）が誘われた。彼は、1591年にジョンとクリストファー・ライト兄弟の姉であったマルタ・ライト³¹と結婚し、熱心なカトリックに改宗した。トマス・パーシーは、背が高く、捻れた灰色の顎髭を蓄え、猫背で赤ら顔、短足であったが、4代ノーサンバーランド伯ヘンリー・パーシー（1449年生-1489年没）の孫で、プロテスタントとして育てられ、ケンブリッジ大学付属のピーター・ハウスに通い、1579年にケンブリッジ大学に入学した。また、彼は、1594年に9代ノーザバーランド伯ヘンリー・パーシー（1564年生-1632年没）にアニク城代に雇われ、1602年に9代ノーザバーランド伯からスコットランド王ジェイムズ6世のカトリックに対する寛容さを要請する手紙を託され、秘密裏にジェイムズ6世に遣わされた使者であった。この手紙では、イングランド王国のカトリック教徒からスコットランド王への請願が説かれ、それに対するジェイムズ6世からの返事は好意的であった。しかし、その後、イングランド王に就いたジェイムズ1世は、カトリックに対する締め付けを厳しくする刑法を制定したために、パーシーは、他の多くのイングランドのカトリック教徒と同様に、この態度の変容に失望し怒りを感じ、国王の暗殺を計画していた。そのパーシーをケイツビーは、彼の陰謀計画に誘い入れた。1604年5月のロンドンのStrand districtにあるDuck and Drake Innでの会合で、パーシーは、トマス・ウィンター、ジョン・ライト、ガイ・フォークに紹介された。

1605年11月4日の火薬爆発未遂事件計画の前日、彼は、9代ノーザバーランド伯と共にロンドン近くのSyon Houseで夕食を摂っていたが、計画失敗の情報が伝えられると、翌日、クリストファー・ライトと共にウェールズの方向に逃亡した。ガイ・フォークス（ジョン・ジョンソンの偽名で活動）がトマス・パーシーの召使いであるとされていたので、最初に王

³⁰ ウィンターは、ガイ・フォークスに、ジェイムズ1世とその従者および家族を殺しミットランドで反乱を起こし、彼の娘エリザベス・ステュワートを肩書きのみの国王に据えること、および、イングランドでは国王殺しの法（大逆罪）が適用されるので、フォークスが大陸に渡り、大陸のカトリック勢力にジェイムズ王殺しが聖戦であることを伝える計画について語ったと思われる。

³¹ マルタは、誠実なカトリックであり、ケイツビーの親友であった。

の名前で指名手配されたのは、パーシーであった。

6番目に誘われた人物は、弾薬や物資を保管するケイツビーの Lambeth house を監視したロバート・キーズ（Robert Keyes）（1565年生？-1606年没）であった。彼の父は、北ダービシャーの Staveley でプロテスタントの教区牧師で、彼の母は、リンカン州 Kettleby のロバート・ティルウィット卿の娘であった。彼の従兄弟のエリザベス・ティルウィットは、その共謀者アンブローズ・ルークウッドと結婚していた。彼は、1604年にカトリック教に改宗し、1604年10月にその共謀者に加わった。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、キーズと義理の従兄弟のルークウッドはエリザベス・ムーアの家にはいたが、その深夜に火薬番をしていたガイ・フォークが発見され逮捕された。11月5日にケイツビーやパーシーなどの共謀者仲間を追いかけ、彼らは、その逮捕のニュースをケイツビーなどに知らせた後に、ミッドランドに向かって逃走した。他の共謀者と共に、Dunchurch（ダンチャーチ）に馬を走らせ、11月7日に共謀者一行は、雨の中、馬を走らせ、Holbeche House に到着した。翌朝、キーズは彼らとは別行動をとり、彼の妻が雇われていた4代 Mordaun 男爵の屋敷に向かい、そこで身を隠すつもりであった。

彼は、11月中頃に捕らえられ、1606年の1月31日に、ウェストミンスター旧宮殿の庭で首を吊られ、去勢され、内蔵を抜き取られ、四つ裂きにされた。彼は、罪状認否の際に、今の死と他の時の死には変わりはないと言って、彼の行為に対して許しを請わなかった。

次の共謀者として、トマス・ウィンターの兄ロバート・ウィンター（Robert Wintour あるいは Winter）（1568年生-1606年没）、クリストファー・ライト（Christopher Wright）（1570年生-1605年没）、ジョン・グラント（John Grant）（1570年生？-1606年没）の3人がほぼ同時に誘われた。この3人は1605年3月までには、その仲間への参加が認められていたと推測される。最初に、ロバート・ウィンターの人物像を見てみよう。彼は、ウスター州のハディングトン・コートでジョージ・ウィンターの長男として生まれ、父方の祖母キャサリン（Catherine）がジョージ・スロックモートン卿（Sir George Throckmorton）の娘であったので、彼はスロックモートン家の子孫であった。彼は、火薬爆発未遂陰謀事件計画の首謀者であったロバート・ケイツビーやトマス・トレシャムとは従兄弟の関係にあった。彼が火薬爆発未遂陰謀事件計画の共謀者に加わったのは、1605年3月であった。彼は、武器と逃亡に必要な馬の調達をし、ジェイムズの娘エリザベス王女を誘拐するハンティング隊のメンバーであった。彼が弟トマスの陰謀計画への参加から1年程遅れたのは、彼自身は必ずしもその計画に気が乗らなかったからである。彼は、馬を調達するためにウォーリック城から馬を盗むことには気が進まなかった。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、彼は、ジョン・グラントやディ

グビー達と共に、エリザベス王女を狩るためにウォーリック州のダンチャーチにあったレッド・ライオン・インにいた。そこでロンドンから来るケイツビーやジョン・ライト達に合流し、ウスター州のハディングトン・コートに向かった。

次に、ジョン・ライトの弟クリストファー・ライト (Christopher Wright) (1570年生-1605年没) は、ヨーク州のウエルウィック (Welwick) に生まれ、彼自身も熱心なカトリックであり、彼の両親は、カトリックを頑なに信じていたために牢獄に入れられた。1601年にエリザベス I 世に反対して、エセック伯の反乱に加わったが、その反乱は失敗したが、彼には重い刑罰は科されなかった。彼がケイツビーの陰謀計画に加わった 6 番目の人物であったという説や、1604年と1605年の間、時々、ロバート・ウィンター (Robert Wintour) 等と共に、陰謀会議に参加したという説もある。この陰謀での彼の役割は、ロンドンでパーシーが賃貸している建物から貴族院まで (実際には使用されなかった) トンネルを掘ることであった。その陰謀計画が最終段階に差し掛かった 1605年10月26日に、第4代モンテグル男爵のウィリアム・パーカー (William Parker, 4th Baron Monteagle) (1575年生-1622年没) の自宅に匿名の手紙³²が届き、それには11月5日の陰謀計画がそれとなくほめかされていた。その男爵はその手紙を第1代ソーズベリー伯のロバート・セシルに届けた。それには、貴族院議会議事録が初日には第4代モンテグル男爵が議事録から離れているようにと書いてあった。その手紙によって、ケイツビー達の火薬爆発陰謀計画が明るみに出された。

この計画を密告するような内容の手紙を差し出した人物はだれであったのか。それは、確定されなかった。その候補者として、フランシス・トレシャム、クリストファー・ライトなどがいた。その男爵は、フランシス・トレシャムの義理の兄 (彼の姉妹の良人) であった。彼は、ケイツビーと共にその件でトレシャムと向き合い、もしトレシャムが無実でないならば、彼を縛り上げることを申し出たが、しかし、トレシャムは無実であることを強く主張し

³² この匿名の手紙の差出人としてフランシス・トレシャム卿が有力であるが、まだ特定されていない。トレシャムの娘エリザベスがモンテグル男爵と結婚していたために、その候補者になった。その他の候補者として、アン・ヴォー (Anne Vaux), モンテグル男爵自身、なども挙げられた。アン・ヴォーは、彼女の手紙と問題の手紙の文面から得られる感覚的な類似性から、その手紙の差出人ではないかと考えられる。男爵自身が手紙を捏造した可能性も否定できない。彼自身は、エセック伯の反乱に参加し、ケイツビーとは親しい関係にあった。1602年にスペインのフェリッペ3世に使節を送ることに加わっていた。このことから男爵はケイツビーの陰謀の概要を予知することはできた。また、彼は、大惨事を避けることによって年間700ポンドを得ていたため、彼にはその陰謀を避ける必要があった。

また、男爵の召使いであったトマス・ウィンター (Thomas Wintour あるいは Winter) (1571年あるいは1572年生-1606年没) が男爵に手紙を差し出す動機を持っていたと思われる。同様に、ガーネットやオールドコーンなどのイエズス会士に隠れ家を提供していたトマス・ハビングトン Thomas Habington (1560年生-1647年没) の妻メアリーはモンテグル男爵の姉妹であったので、ハビングトンには手紙を出す動機があった。

た。フランシス・トレシャムは、クリストファー・ライトが火薬爆発陰謀計画を密告する手紙 (モンテグル・レター) の差し出し人であったと証言した。

ミッドランドで蜂起し、エリザベス王女を誘拐する際に武器や弾薬などを供給するための屋敷を護る役割を担ったジョン・グラント (John Grant) (1570年生-1606年没) は、カトリック教については関心がなかった。彼は、ウォーリック州のスニッター・フィールドの近くのノルブルック (Norbrook) に住んでいたが、ラテン語や他の言語を研究した知識人で、火薬爆発未遂陰謀事件計画の共謀者の一人であるトマス・ウィンターの姉妹ドロシー (Dorothy) と結婚していた。また、彼は、ケイツビーやウィンター兄弟と共に、エセックス伯の反乱に参加していた。彼の役割はミッドランドでの蜂起の際に武器や弾薬を補給する家屋を確保することであったので、彼が住んでいたノルブルックに武器や弾薬が保管された。その地は、ミッドランドのウォーリックとストラストフォード (Stratford) の近くであった。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、彼は、ディグビーと共に、エリザベス王女の狩りのためにウォーリック州のダンチャーチにあったレッド・ライオン・インにいた。そこでロンドンから来るケイツビーやジョン・ライトやクリストファー・ライトやパーシーなどの共謀者と共に、ウォーリック城で物資を調達し、ノルブルックおよびウィンザー公の屋敷で武器や弾薬などを集め、ハディングトン・コートに行き、それから、1606年11月7日の夜、彼等はスターフォード州の国境近くの Holbeche House に着いた。そこで、ずぶ濡れになった弾薬を火の前で乾かしているときに、火花がそれに移って着火し、大火事が発生し、ケイツビー、アンブローズ・ルークウッド、ジョン・グラントなどがその巻き添えをくった。グラントは、目をやけどし、失明した。翌日、共謀者の隠れ家 Holbeche House がウォーリック州の200人の警察官に取り囲まれ、銃撃戦になり、ケイツビーやパーシーやライト兄弟などは銃撃戦で死亡した。グラントは生き残ったが、捕らえられた。ロンドン塔に連れて行かれた。その11月27日に罪状認否がウエストミンスター・ホールで行われ、彼は、無罪を主張したが、起訴された。11月30日にそこから編み垣に縛られ、ロンドン通りを歩いて聖ポール大聖堂の教会に着いた。その庭でディグビー、ロバート・ウィンター、トマス・バートと共に、彼は、首を吊られ、去勢され、内蔵を抜き出され、4つ裂きにされた。グラントは、首吊り執行の際に告白を拒否した。

次に、共謀者に誘われた人物は、アンブローズ・ルークウッド (Ambrose Rookwood) (1578年生?-1606年没)、エバーラード・ディグビー (Everard Digby) (1578年生?-1606年没)、フランシス・トレシャム (Francis Tresham) (1567年生?-1605年没) の3人であった。これらの人物は、計画実行の直前に資金獲得のためにリクルートされた。

アンブローズ・ルークウッド (Ambrose Rookwood) (1578年生?-1606年没) は、300年の間サフォークに居住した、裕福なカトリックの家系に生まれ、堅固なカトリック教育を受

けた。彼には2人の兄弟がいたが、2人とも牧師になり、彼の2人の姉妹は尼になった。彼の両親は、国教を忌避したために、投獄された。彼は、ロバート・キーズの従妹のティウィット・エリザベスと結婚した。彼は、1605年9月にケイツビー、トマス・ウィンターおよびジョン・ライトによって彼らの計画に入るように誘われた。彼は、10番目であった。その計画の実行間近に、彼を計画に引きずり込んだのは、第1に、資金が不足してきたこと、第2に、彼らのミッドランドでの蜂起する際に必要になる名馬をルークウッズが持っていたためであった。また、彼はケイツビーの要請でスターフォード州の Clopton House を賃貸した。彼は、ここに宗教上の象徴であった十字架、ラテン語の聖書、礼服や聖杯などを持ち込んだ。しかし、最初、ルークウッズは、爆発によって傷つくカトリック議員の問題に引っかかり、計画に参加することを渋っていたが、彼は、ケイツビーが彼らを議会の外に置くと約束したことやイエズス会がその計画に賛成しているという虚偽によって説得された。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、ロンドンに居た彼は、クリストファー・ライトおよびパーシー、次に、キーズがロンドンを離れた後から、ロンドンを去った。彼は乗馬の名手であったので、ライトならびにキーズよりも先にダンステーブル回りで馬の蹄鉄を付け替えていたケイツビーやジョン・ライトに追いつき、彼らにロンドンでの出来事を伝えた。ロンドンからの逃走者は、ダンチャーチでディグビー達と合流した。

彼は、ケイツビー、ライト兄弟ならびにグラントと共に Holbeche House に残ったが、11月8日の朝、ウスター州の警官に包囲され、銃撃戦になり、ライト兄弟、ケイツビーならびにパーシーは撃ち殺され、トマス・ウィンターは負傷したが、生き残り捉えられた。Holbeche house を去ったディグビーやキーズも捉えられ、ウスター州に護送され、ロンドン塔に送還された。

次に、フランシス・トレシャムは、父トマス・トレシャム (Thomas Tresham) と母メリエル・スロックモートン (Meriel Throckmorton) の間に長男としてノーザンプトン州で生まれ、グロスターホールで教育を受けたという説がある。彼の父がカトリック・コミュニティの指導者であったことから、彼は、カトリック教会に受け入れられた。彼は、ケイツビーの母親 Anne Throckmorton がフランシス・トレシャムの叔母であったので、ケイツビーと従兄弟であった。彼もジェームズ国王には期待していたが、非国教徒に対する罰金刑の廃止や森林税に関する約束を履行していないことに対して不満を懐いていた。1596年にエリザベス1世が病気になったとき、予備的手段としてトレシャム、クリストファーとジョン・ライト兄弟およびケイツビーなどのカトリック社会の指導者グループは逮捕され、ロンドン塔に監禁された。1601年に彼は、エセックス伯の反乱に参加したが、捕らえられ獄中に収監された。彼は、スペイン王にイングランド侵攻を説得するために、1602年にトマス・ウィンターやガイ・フォークなどで結成されたマドリッド使節団の一員であった。彼は、イングランドのカ

トリックの大儀のために活動した。しかし、陰謀計画は1605年10月14日までトレシャムには打ち明けられなかった。彼の父親トマス・トレシャムが亡くなった後に、その計画が打ち明けられ、それに誘われた。

10月14日に、義理の兄弟であったエドワード・スタートン(Edward Stourton, 10th Baron Stourton) (1555年生?-1633年没)の家があった Clerkenwell でケイツビーと会合がもたれた。その会合でトレシャムは、2つのことを求められた。第1に、2,000ポンドの資金提供、第2に、ノーザンプトン州の Rushton Hall の使用が求められた。彼の資産が目当てでその計画に誘われた。従兄弟のケイツビーの火薬爆発陰謀計画のメンバーに加わったが、しかし、トレシャムには父親の負債のために金銭的余裕がなく、また、彼の家族がすでにロンドンに戻り、彼の先祖代々の Rushton Hall を閉鎖していたため、それを陰謀者に提供することができなかった。

11月1日に匿名のモンテグル・レターが国王ジェイムズ1世に渡り、翌日2日には枢密議会のメンバーは、貴族院および庶民院を捜索することを国王に報告していた。トレシャムは、ケイツビーとトマス・ウィンターに爆破計画を止めるように忠告したが、パーシーは最大限の努力を続けることを主張し、ケイツビー達は11月4日にミッドランドに向けてロンドンを出発した。そのモンテグル・レターの差出人はトレシャムであると言われているが、彼は、ロンドン塔で、その死の床での告白においても、その手紙については何も述べていない。彼がその手紙を書いた可能性が高いが、その手紙をモンテグル男爵から受け取ったソールズベリー伯自身がその手紙を書いた可能性もある。

1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚した後も、彼は、ロンドンに留まった。彼は、11月12日に逮捕された。彼は、その手紙の事については否定し、ロンドン塔の中で泌尿器系統の炎症によって引きおこされた strangury のために、1605年12月23日に死亡した。彼は裁判を受けていないにも拘わらず、ケイツビーやパーシーと同様に、彼の首はノーザンプトンで晒された。

この計画に資金を提供した有力なカトリック教徒には、トレシャムの他に、エベラード・ディグビー卿(Sir Everard Digby) (1578年生?-1606年没)がいた。ディグビーは、バッキンガム州のカトリック教徒であったが、幼い頃にはプロテスタントとして育てられ、1596年に10代でプロテスタントの Mary Mulshaw と結婚した。この結婚によって、彼女の持参金としてバーミンガム州の Gayhurst House を財産としてもたらした。彼女は、イエズス会士ジョン・ジェラルド(John Gerard) (1564年生?-1606年没)によってカトリックに改宗し、また、重篤な病気を患ったとき、彼自身もカトリックに改宗させたジェラルドは、彼の長男の名付け親で、Gayhurst に隠れ礼拝堂と聖具安置室を建てた。

彼がケイツビーに会ったのは1605年10月21日であった。ディグビーは、イエズス会士の

ガーネット (Henry Garnet) (1555年生-1606年没) とアンネ・ボー (Anne Vaux) (1562年生?-1637年没) がディグビーの居住地の Harrowden (ベッドフォード州の村落) で聖ルカ祝日を祝福していた時に、ケイツビーと出会った。ケイツビーは、警戒しながら、ディグビーに陰謀計画を話した。ディグビーがその計画をどれ程知っていたかはよく分からない。ケイツビーがその計画にディグビーを引き込むに際して、その爆発によって捕らえられる者は誰もいない、その計画はすでにイエズス会士には話してある、さらに、イエズス会の許可なしには行動に出ないなどと言葉巧みに説得したと思われる。ケイツビーは、ディグビーにウォーリック州の Coughton Court を Throckmorton 家から賃貸することならび金銭的な援助を頼んだ。ウェストミンスターへの借家の賃貸の支払にトマス・パーシーが困っていたので、彼は1,500ポンドの援助を約束した。彼のこの陰謀計画での役割は、ウォーリック州のダンチャーチ (Dunchurch) のレッド・ライオンに身を隠し、Hunting Party の準備をすることであった。そこには、彼の他にロバート・ウィンターやヘンリー・グラントもいた。

ガイ・フォークの逮捕が知られたとき、ロンドンに居たパーシー、クリスタファー・ライト、ルークウッドなどの共謀者は、11月5日に、ミッドランドに逃走した。先に、ロンドンを出発していたケイツビーやジョン・ライトに計画の失敗を知らせ、そしてダンチャーチのレッド・ライオンでディグビー達と合流した。そこから、共謀者達は、ウォーリック城に攻め入り、馬や物資などを調達し、次に、ウォーリック州のノルブルック (Norbrook) で保管してあった武器を集め、ウスター州の Huddington Court に向かい、11月6日の午後2時頃にそこに着いた。11月7日の夜、雨の中、馬を走らせ、スターフォード州のヘウエル・グランジ (Hewell Grange) のウィンザー卿の家から武器や弾薬などを持ち出し、そしてスターフォード州の国境にある Holbeche House に着いた。夜中に雨で濡れた火薬を乾燥させている最中に引火し、破裂し、グラントは失明し、何人かは負傷した。ディグビー、トマス・ウィンターはそこを去った。翌朝(11月8日の朝)、200人の警官隊に囲まれ、残っていたケイツビー、パーシー、ライト兄弟、ルークウッズやグラントンは、撃ち合いになり、ウスター州の長官に射殺された。

ディグビーも捕らえられ、ロンドン塔に連れて行かれ、ウェストミンスター・ホールで1606年1月27日罪状認否が行われた。その時、彼のみが無実であるという弁論をしなかった。ディグビー、ロバート・ウィンター、ジョン・グラントンは、11月30日に、セント・ポール大聖堂の教会の庭で吊るし首になり、去勢され、内蔵を切り抜かれ、四つ裂きにされた。

偶然に陰謀計画を知った、ケイツビーの召使いであったトマス・ベート (Thomas Bates) (1606年没) もこの計画に引き込まれた。彼は、ウォーリック州の Lapworth で生まれた。彼は、7番目に計画に誘われた人物であった。1604年12月にはそれに加わっていた。1605年11月4日の真夜中に、その陰謀計画が発覚したとき、彼は、ケイツビーと共にミッドランド

に向かっていた。それから Holbeche House まではケイツビーと行動を共にしたが、11月8日の朝、その House を去っていたが、その日に彼も捉えられ、ロンドンに送還された。1606年1月27日にウェストミンスター・ホールで裁判され、他の共謀者と同様に死刑が言い渡された。彼は、身分が低かったので、ロンドン塔の近くの Gatehouse Prison に投獄された。1月30日、そこから聖ポール教会庭園まで、編み垣に縛られ、通りを馬に引かれて連れてこられ、そこで吊され、引き裂かれ、四つ裂きされた。

火薬爆発未遂陰謀事件計画では、ジェイムズ国王を殺害し、王の子女エリザベスを捕らえ、彼女を形式上の王位に就け、カトリックの君主国にイングランドを戻すことが計画されたが、臆病なカトリック教徒の共謀者が彼の親戚であった男爵に投じた匿名の手紙で、事前にその計画が当局に漏れ、1605年11月4日の夜に、火薬の番をしていたガイ・フォークスは取り押さえられ、逮捕された。11月6日には、関係者のモンタージュが作成された。ウォーリック城から物資を盗んだ罪で共謀者一行はウスター州の警察隊に追走され、ケイツビー、パーシーやライト兄弟は、隠れ家 Holbeche House でウスター州の警官との撃ち合いの最中に撃ち殺された。ガイ・フォークスやウィンター兄弟やトレシャムやグラントやディグビーやキーズは捉えられ、ロンドン塔に投獄され、拷問され、処刑された。この未遂事件計画に関与した人々は、殺害されるか処刑されるかした。ディグビー、ロバート・ウィンター、ジョン・グラントは、1606年1月27日にウェストミンスター・ホールで罪状認否がなされ、ディグビーのみが罪状を認め、他は無罪を主張したが、彼らの嘆願は受け入れられなかった。その年の1月30日に、ロンドン塔からディグビー、ロバート・ウィンター、グラントとゲート・ハウス監獄から連れてこられたトマス・ベートの4人は、セント・ポール大聖堂の教会の庭で吊され、去勢され、内蔵が抜かれ、四つ裂きの刑で処刑された。その日の最初に処刑されたのはディグビー、次はロバート・ウィンター、3番目はジョン・グラントであった。翌日の1606年1月31日に、ロンドン塔からウェストミンスターの旧宮殿の庭に、編み垣に縛られ、馬に引かれて、ガイ・フォークス、トマス・ウィンター、ロバート・キーズ、ルークウッドが連れてこられ、そこで吊され、去勢され、内蔵を抜き出され、4つ裂きにされた。最初に処刑されたのはトマス・ウィンター、次はルークウッド、3番目がキーズ、最後がフォークスであった。

この未遂陰謀計画でイエズス会士の聖職者も処刑された。エドワード・オールドコーン(Edward

³³ 彼は、ヨークで煉瓦職人の息子として生まれた。彼の父親はプロテスタントで、母親はカトリックであった。彼は、聖ピーター学校で教育を受けた。彼の同窓には、ジョンおよびクリストファーのライト兄弟やガイ・フォークスがいた。彼は、フランスのランスのイングランド神学校で教育を受け、ローマで叙職され、1588年にイエズス会士になった。1588年にジョン・ジェラルド(John Gerard)の一同と共にイングランドに戻った。イングランドでは、主に、ウスター州で宣教活動をした。彼の宣教活動は、オズワルド・

Oldcorne)³³, ヘンリー・ガーネット (Henry Garnet)³⁴, オズワルド・テジモンド (Oswald Tesimond)³⁵ (1563年生-1636年没), ニコラス・オーエン (Nicholas Owen)³⁶ (1606年没) などがこの陰謀事件に関わった廉で捕らえられ, 処刑された。オールドコーンとこの陰謀計画との関わりは不明であったが, 彼は, 聖職者であったために, また聖職者に隠れ家を提供したために処刑されたと思われる。この陰謀計画に加担したとして処刑されたガーネットと陰謀計画の首謀者ケイツビーとの関係を見ることによってイエズス会がこの陰謀にどのように関わったかを理解できるであろう。ガーネットは, ケイツビーに3度か4度会っている。最初, 1605年6月9日に彼はケイツビーにロンドンで会っている。このとき, ケイツビーは彼に無実の人を殺すことの道徳性について尋ねた。ガーネットは, ケイツビーに戦争中には無実の人も敵と共に殺されることがあると返答した。次に, 1605年7月には, エセック州のフレムランド (Fremland) で会った。彼は, ケイツビーに何を計画しているのか告げるように

テジモンド (Oswald Tesimond) などに助けられた。彼は, 1605年にテジモンド, ガーネット, ニコラス・オーエン, ジェラードなどの30人ほどで St Winefride's Well を巡礼した。この巡礼には, ディグビー夫妻も参加していた。1605年11月4日の真夜中に, その陰謀計画が発覚したとき, 彼は, Hindlip Hall に居た。ここにガーネットやオーエンが加わった。オールドコーンはガーネット共に逮捕さ, ロンドン塔に連れて行かれた。オールドコーンは, 陰謀者に隠れ家を提供したために罰せられた。彼は, ウスター州の Red Hill でジョン・ウィンター, ハンプリー・リトルトン (Humphrey Littleton), ラルフ・アシュリー (Ralph Ashley) と一緒に処刑された。

³⁴ 彼は, ダービー州の Heanor で生まれた。彼は, ノッティンガムとウィンチェスターで教育を受け, 1571年にロンドンに移り, 出版関係に就職した。彼は, ローマに行き, ロベルト・ペラルミーノ (Robert Bellarmine) (1542年生-1621年没) の下で研究をし, 1575年にイエズス会に入会した。彼は, 1586年にイングランドに戻り, イングランドでの宣教に努めた。イングランドの修道院長のウィリアム・ウェストン (William Weston) (1550年生?-1615年没) が捕らえられると, 彼がそのイングランド修道院長の職を受け継いだ。1594年には, Wisbech Stirs と知られるイエズス会の聖職者と世俗の聖職者の論争を仲裁した。

³⁵ 彼は, ヨークのウィリアムおよびマリーのローヤル学校で教育を受け, 1584年にイエズス会に入会した。彼は, イングランドのウスター州およびウォーリック州でオールドコーンと共に宣教した。彼の火薬爆発未遂陰謀計画との関わりは, 間接的で, その計画には関与して居なかったと思われる。しかし, 彼は, 陰謀者ケイツビーの告白によって, その計画をしり, そのことを上役のガーネットに知らせた。彼とガーネットは, その陰謀が大罪であると知りながら, その秘密を保ち, 政府当局に知らせることはしなかった。彼には逮捕指名手配書が宣誓されたが, 彼はロンドン警察の手から逃れ, エセックスおよびサフォークを経由して, カレーに逃れた。その後, 彼は, イタリアのナポリ, メシナ, ローマで活動し, 死亡した。

³⁶ 彼は, イエズス会の平信徒であった。彼は, ロンドンで熱心なカトリックの家庭に生まれた。彼は大工になり, 30年間, カトリック教徒の家に聖職者の隠れ家を造る仕事に従事した。彼は, 長い間, ヘンリー・ガーネットの宣教活動に携わり, イエズス会の平信徒として入会を許された。彼は, 1582あるいは1583年にエドモンド・カンピオン (Edmond Campion) の処刑後に, エドモンドの無実を公言したために逮捕された。開放されたが, 1594年再び逮捕され, 拷問を受けた。彼は, 1597年のイエズス会の修道院長ゲラルドのロンドン塔からの脱出を計画していたと信じられている。火薬爆発未遂陰謀計画事件では, 1606年に彼は, 隠れていたウスター州の Hindlip Hall で捕らえられた。彼は, Marshalsea に移送され後に, ロンドン塔に送られた。彼は, 鉄ごてで, きつく手首を縛られ, 壁からぶら下げられ, 酷い取り調べを受けたが, 取調官には何も吐くことなく死亡した。

頼んだが、確実に知ることはできなかった。彼は、行動の合法性を確かめ、国家に必要な人を酷い目に遭わせないように注意することをケイツビーに話した。彼は、このときケイツビーの計画を確実に知ってはいなかった。3度目の2人の会見は、その7月24日頃であった。彼がオズワルド・テジモンドからケイツビーの計画を知らされた。オズワルドがケイツビーの告白からケイツビーの計画を知ったので、ガーネットは、誰もケイツビーに警告することができないと感じていた。彼は、彼の考えを伝えるためにケイツビーに会った。彼は、ケイツビーにその計画をローマ教皇に話すように諭したが、ケイツビーはそのことを断った。ガーネットは、その陰謀が知られないように、バイ陰謀のときにしたと同様に、ローマ教皇に軍隊の使用を警告することを勧めた。議会がその28日に停会したとき、ガーネットは、危険が回避されたと思った。

1605年11月6日、ケイツビー達がウォーリック城から物資を略奪し、Norbrookで保管されていた武器を集め、Huddingtonに向かい、Coughton Courtに居たガーネットなどの聖職者に手紙を出し、陰謀計画が漏れたことを伝え、ウェールズで軍を起し助けることを頼んだ。しかし、ガーネットはケイツビーとその協力者に不道德な行動を止め、彼らにローマ教皇の説得を聞き入れるように返答した。

ガーネットがこの陰謀計画にどれ程関わったかは不明であるが、彼はケイツビーの火薬爆発未遂陰謀計画を、ケイツビーがオズワルドに証した告白によって知っていたが、その告白は秘密にされるために、彼はケイツビーの陰謀計画を当局には伝えなかった。この点が裁判では問題になったが、彼は、陰謀に関わったことは否定した。政府側の証言者としてエドワード・クック（Edward Coke）³⁷（1552年生-1634年没）は、ガーネットがその陰謀に関与したことを非難した。

この火薬爆発未遂陰謀計画は、ジェイムズ国王による国教徒優遇政策に対するカトリック教徒の反発にすぎないという印象を拭いきれない³⁸。というのは、その少数のカトリック教徒の運動が、イングランドの庶民全体を巻き込んだ運動に展開しなかった。その陰謀は、ジェイムズ1世の宗教政策に対する反抗に過ぎなく、国王にカトリック教を遠ざけ、イングランド王国をさらに一層主教制（反カトリック）の国に傾かせることになったと理解される。

³⁷ 彼は、エリザベス1世およびジェイムズ1世の治世下で、最も偉大な法律家で、弁護士、裁判官および政治家であった。彼は、ケンブリッジ大学のTrinity Collegeで教育を受け、Inner Templeに進み、1578年に、そこで弁護士の免許を取得した。弁護士としていくつかの裁判に関わり、議会議員に選出され、そこで検事次長として働き、次に、議会の議長として活躍した。彼は、ロバート・デヴェロー（Robert Devereux）、ウォルター・ローリー（Walter Raligh）および火薬爆発未遂計画事件の共謀者の裁判を担当し、その後、検事総長になった。

³⁸ しかし、この事件をスロックモートン家に関わる人々の新教に対する一連の反乱と位置づけることができる。ここではこの問題に深く立ち入ることはしない。

むすびにかえて

本稿では、スコットランド王国とイングランド王国の同君連合王国が成立し、前者の国王ジェイムズ6世がイングランド王ジェイムズ1世として戴冠することに反発し、彼の統治政策に対するカトリックによる陰謀計画事件を概観した。ジェイムズ1世は、合法的で正当な国王であることを認め、教会の権威および教皇職の権威によって教皇には、国王を解任する権力がないことを認め、また、教皇には、国王を外国の王女と据え替える権限もなく、武器を持ち騒動を起こすことを許可する権限もないことを認めた。イングランド臣民にこの忠誠を宣言させた。これゆえに、イングランドでは、この事件を機に、ジェイムズ1世は、エリザベス1世以来の「国王至上法」を継承・強化することとなった。国王至上によってカトリック主義者の勢力が抑えられた。議会内では、新教徒（ピューリタン）が勢力を盛り返した。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著 (武藤 一雄・藺田 宗人・藺田 坦 共訳) 『宗教社会学』創文社 1976年8月
マックス・ウェーバー 著 (大塚 久雄 訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
リンダー・コリー著 (川北 稔 監訳) 『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000年9月
スマウト, T. C. (木村 正俊 監訳) 『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
A. L. モートン (鈴木 亮・荒川 邦彦・浜林 政夫 訳) 『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
ジョン・ロック著 (加藤 節 訳) 『統治二論』岩波文庫 2010年12月
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年

(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)